

# あしよろ・ハードサポート通信

足寄町では、実に半数以上の酪農家さんが何らかの形で放牧を取り入れています。春夏は放牧メインの経営や、TMR 飼料と併用している経営、コストダウンや運動のために一定時間だけ放牧をしている経営など、やり方や目的は十人十色です。

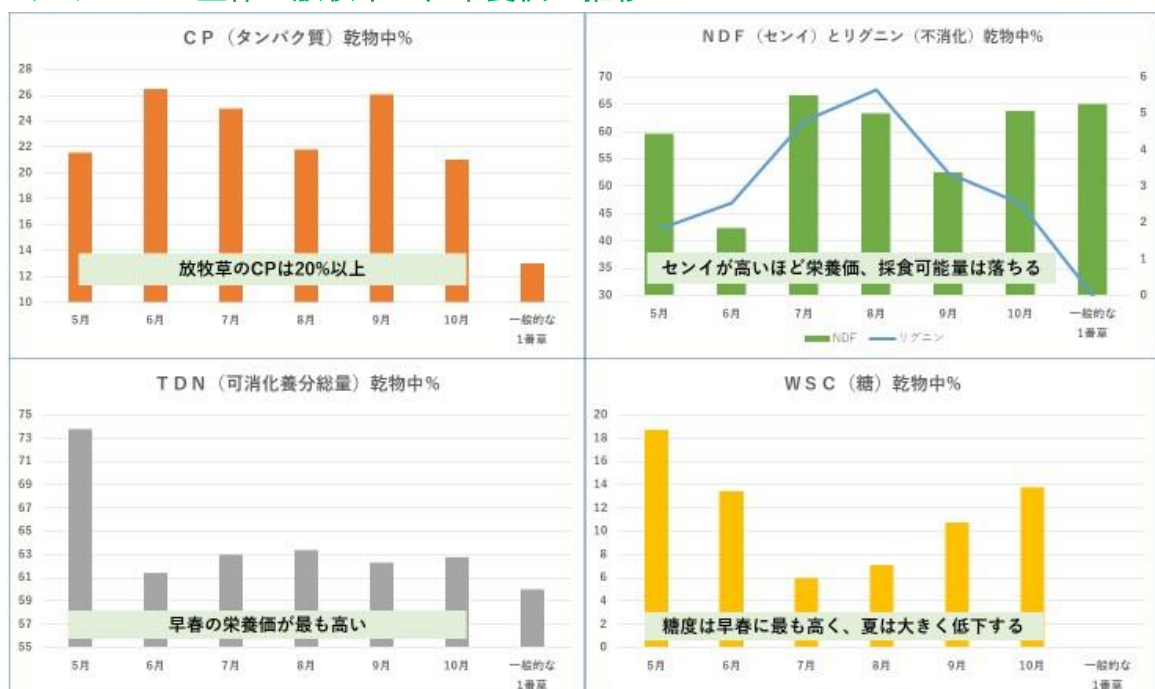
## ◆ 泌乳牛の乾物摂取量



乳牛の栄養は、飼料の水分を除いた「乾物量」で考えます。ホルスタインのような大型種では、ざっくりですが、健康・一定の乳生産・良好な繁殖サイクルを維持するための「牛群」としての乾物摂取量は、1日1頭当たり20~22kgであってほしいです。

この乾物摂取量20~22kg/日/頭は、水分80%の放牧草の実重量だと100~110kgほどに相当します。もしも泌乳牛のエサをすべて放牧でまかなうとしたら、放牧地から毎日、ものすごい量の放牧草を確保しなくてはならないことが想像できます。

## ◆ チモシー主体の放牧草の、栄養価の推移



グラフはチモシー主体放牧草の栄養価の月ごとの変化を示しています。タンパク質は5月から10月にかけて高く推移し、NDF（セニイ）は早春に低く、7-8月に向けて上がっていきます。セニイ含量は上がるほど栄養価が落ち、採食量を制限する性質があります。エネルギー源となるWSC（糖）は早春に高く、夏は大きく低下する傾向です。

### ◆夏、これからの放牧



早く帰ってくるのは放牧草が足りないサイン

夏は放牧草の再生力が弱まるので、草量の確保に向け牧区を拡げる、昼夜放牧を日中/夜間放牧に切り替える、牛舎内での粗飼料の給与量を増やす、などの対応を取ります。

栄養面では、タンパク質は高いがセニイ含量も高く、糖分は低下するため、泌乳前期牛・授精対象牛には、エネルギー源飼料（コーン、パルプなど）での栄養補給が効果的です。



大きな木の下に群がるニュージーランドの乳牛

暑熱ストレス下では採食量が落ち、免疫低下から乳房炎などの疾病を招いたり、受胎しづらくなったりします。

放牧地に日除けがない場合は、夜間放牧に切り替え、日中は舎飼いし、扇風機を回すなどして体感温度が下がるように対策します。

例年、これからの時期には、大幅にMUNが上がったり、アルコール不安定乳が出てしまったりすることがあります。多くは放牧草の栄養価の変化（タンパク質は高いがエネルギーが落ちる）、再生力の低下による乾物摂取量の不足、暑熱ストレスによるダメージが影響しているのではないのでしょうか。

毎日の採食量をモニターし、群の乾物摂取量と栄養バランスをつかめるようになると、具体的な課題が見えてきたり、乳牛の健康度や効率がより上がるように感じています。

放牧はまだまだ勉強中ですが、ご自分の牛群の乾物摂取量など、気になることが出てきたときには、どうぞご相談ください。  
(久富聡子)

.....  
・長い雨降りの日々がようやく終わり、収穫作業が一斉に再開しました。1番草収穫の大幅な遅れは全道的な傾向で、残念ながら例年よりも栄養価が落ちる可能性が高いです。めやすを知るためにも、新物は給与前に粗飼料分析に付けることをおすすめします。